VOL. 8 No. 8

# 針葉樹會報

通卷第六十九號

## 奥又白谷生活（二）

日江井正己

それから時間の經つのが實に待遠しかつた早く夜が明ければ良いと一心に願つた。そのため五目並べ、經濟學の講義、小說讀み等々、數々の隱し藝を披露に及び遂に待望の朝になつた。しかし夜中の一時頃から變調になつた天候は依然良くなく霧は岩壁に捲きついて放れず、晴れるまで待たうとしたがその徵候見えず、それ故登攀を始めた。第一のテラスまで難なく行き、そこから頂まで緊張する所三ヶ所にして惡場を終つた。案外この登攀にも時間はかゝつてゐるが、愼重にやつたからと思ふ、ビヴアーク地より頂上まで二時間半かゝつた。頂上直下で大塚の聲がしたので張切つて返事をし、すぐ行く旨返事をしたのであつたが頂上に來て見ると人影なく、ほんの今し方捨てたらしいパンの袋があつた、僕等は無言でうらめし相に手に取つて淋しく天幕へと下りた。天幕では二人が美味しい飯を作つて置いてくれたので本當にありがたかつた。聞けば頂上直下での僕等の返事を聞き違へたとの事僅々二十分で逢ふ事が出來なかつたのだつた。

ビヴアークの一晩の事、その日の天幕の事等色々話をしてゐる中に雪が降りだし見るまに積つてゆく、約一寸位でやんだ。明日の休養をたのしみに夜は又々助さんの就職の話につひ夜深しする。翌二十三日は晴れたが池の附近が暖かいので寢そべつて休養する。

二十四日は又々快晴、今日は一昨日のパーティーの行く所を逆にし僕等は四峰へゆく、助さん達は僕等が夏登つたルートを行く事にして出掛ける。四峰は實は氣持良く途中二三回小銃の彈のやうな唸りと共に飛び來る落石に驚かされはしたが割合早く前穗頂上に着く、早く出た助さん達さも頂上で會へ心から成功をよろこびあふ。

今年冬期登攀への準備がこれで出來たわけだ。後は僕等の頑張りと體力に由るのだ。二十五日はもう計畫も終つたのだし皆一しよに下りやうさいふ事になつたが寢坊してしまひ教練の時間の足りぬ助さんは斷然飯を食はずに歸へるといひ皆あはてゝ持物をしまひ、助さんにつれられて森川さんも下りてしまふ、大塚と二人で天幕等を木に縛りつけてなつかしい池に別れを告げた。德澤で一時間許りのび一時出發薄ぐらい德澤を溯る、池からあまり勢づけて下りて來たせいかいやにつかれる、それでも大瀧小舍へは四時半頃ついた。夜はさすがに寒かつた。二十六日はまた〳〵快晴あまりの天氣に少々てれる、さいふのは如何に我々二人が下界で善良なる行をしてゐるかといふ事の證據になるから。二人は頂上で穂高の展望を恣にして下りについた。案内圖に散々カモられてくさりにくさつて小倉へついたら途端にバスは出た直後その後だと今日中に東京へ歸れぬ。仕方なしに一日市場まで歩いた。松本平の田では稻刈りに農夫は忙し相だ、應召の旗が各部落に平均五六はある。

さうだ上海は陥落したらうか。北支はどうだらう、二人は互に話しながら自然に足が早まつて行つた。

× × ×

## シニオルチュ登攀 Siniolchu—6,981 m. (二)

九月十八日、いよ〳〵シニオルチュを攻撃すべく食糧を一部運搬した。次の朝は物凄い好晴で、吾々はB・C近くの氷河の堆石上に座し双眼鏡で今一度ルートの詳細に亘つて偵察を行つた。シニオルチュ氷河上の吾々の日指すルートはその上方迄はつきりと見渡す事が出來た。そしてシニオルチュ、小シニオルチュ間のザッテルに達すべき急峻な氷上の横斷が最も悪く見え、殊に稜線直下は氷が大部分くづれてゐた。ザッテルからシニオルチュらの西尾根は比較的可能性ある事を示してゐるが、第一峰と主峰とを分つ大氷壁は更に難問を提出してゐる。而も今吾々の頭を惱ましてゐるのは最近に降つた深雪であつた。それは約五〇〇〇米の下方迄あらゆる物に冬衣を着せて了つた。之等の深雪はシニオルチュ氷河にも勿論深く積り、北面は殊にひどく一日位の晴天では殆んど變化を認めることは出來なかつた。

九月十九日午近く吾々六人（隊員四名と人夫二名）の者は各自背負へるだけしよつてB・Cを出發した。そしてゼム氷河を横切りシニルチオユ氷河の堆石近くとあるシエルターに天幕を張つた。夜の中に空は雲つて了つたので期待した程の寒さには襲はれなかつた。翌日積雪は只ほんの表面のみクラストし相變らきぽく〳〵もぐつた。太陽が上るや否や雪は尙軟くなつて了ひ、吾々の前進はこの爲非常に苦しめられたのであつた。その故に吾々の歩は遲々たるものであり遂に午前中約五〇〇〇米の地點に天幕を張らねばならなかつた。午後吾々は明朝速やかに前進が出來得る樣に堅氷の上にステップを刻んでをいた。

廿一日の朝、吾々は直ちに氷涯（アイス・フォール）を越え、第二の氷涯の突端たる大雪原をよこぎつた。此處で約一ヶ月前に來た時殘してきた食糧器具等を探したが、深雪にうづまつて了つたかいくら探しても見當らなかつた。第二の氷涯は相當に手強く

その右手に登路を見出したが、それは無數のステップ・カッティングを必要とし尙且最も急峻な箇所は人夫の荷物を綱につけて引張ってやらねばならなかつた。かくてこの氷涯の上約標高五七〇〇米の地點に天幕を張つた。其處は丁度小シニオルチュからそぎ落ちてゐる岩壁の脚下であつた。

そのキャムプ・サイトは又寒く氣持の良くない場所であり、午後二時と云ふに陽光は既に小シニオルチュの稜線の彼方に消えて了つた。雲は降下し雪がまた降り初めた。吾々は此のサイトに人夫達を殘して行かねばならなかつた。シニオルチュの最後の一二〇〇米許りは重荷を負つた彼等を連れてゆくには余りに急峻であり、たとへ連れて行き得たにしてもそれは非常に時間を費すと思はれたからである。彼等と共に吾々の居心地よき品々、例へば天幕、寢袋、プリムス・ストーヴ、食糧袋等を殘してゆかねばならず、吾々は只各自のリュックサックの中に携行し得るものゝみに賴らねばならなかつた。即ち吾々の唯一の露營用具たるテント・パッゲと小メタ厨爐が吾々のもち得る大部分であつた。

廿二日の朝吾々四人は前進した。急峻なガリーに幾らか手固づつて、いよ〳〵西尾根の稜線へ出る可き深雪の急斜面を横切る箇所へきた。吾々の居るのは北面ではあるが、強い南風が尾根を越へて雪を飛ばしてくるのでかくも深く積つて了つたものとみえる。而も陽氣が不足のせいか何時までも軟く且粉狀のまゝ殘つてゐたのであつた。

午後二時遂に吾々は西尾根に達した。それは約六二〇〇米の高度である。反對側のパッサンラム氷河面（南方）は物凄い急峻さをなして落ち込み、ゼムの側には巨大な雪庇が張出してゐた。それから吾々は急峻な且峽い尾根を僅か二百米足らず進んだのみで日沒がせまつたのでその絶壁の如き氷壁上に停止せねばならなかつた。この尾根は今迄の所は決して稜上を進む事は出來ず始終次第に傾斜を增すパッサンラム側から、ゼム側の雪庇の上へ渡りまた反對側へ移りつゝ登らねばならなかつた。その故に吾々のルートを求めるのは唯ピッケルのみであり、そのさぐりを入れてゐる時雪庇の一角が崩落し雪崩を起したこともあつた。そしてそれは遙か下方のゼム氷河へ落下し吾々の登路の一部を破壞して了つた。

かくして或る風當りの良い雪のレッヂにビヴークの用意を始めた。その直下は文字通りそぎ落ちゐるパッサンラムの奈落である。氣温は攝氏零下8度。吾々は兩足をリュックサックの中に入れてテント・パッゲの中に座し、あらゆるものを總動員して身に卷きつけた。余り寒くはなかつたが尾根の一番突端にゐたパウエルは風の爲ひどい寒さを感じたに違ひない。

廿三日は午前六時既に前進の途上に在つた。鋭い刄の如き尾根は比較的平坦な傾面と化してゐたがオーヴーハンゲな雪庇が北側に張出してゐる爲、急峻な南側に登路を採つた。八時に吾々は前衛峰と主峰との凹部に達した。前途はまだ相當にあるので此處でパーティを二分し、パウエルとヘップとはサポート隊として他の二人が日暮迄に歸れない時、ビヴーク用具を持つて彼等を仰へる爲にあとに殘つた。ゲットネルと私とは輕裝して更に登攀を續行した。先づ吾々は困難なる六十米餘の氷壁にぶつかり、その後に

は又雪庇狀の尾根がひかえてゐた。之を過きると正午近く遂に吾々は最後のピラミッドの基部に到着することが出來た。

天候は著しく良かつた。遙か下方には雲が波立つてゐたが吾々の頭上のみは朗らかな陽光が躍り、南方から微風が穏やかに吹いてゐた。尾根の積雪狀態もその方向を異にするにつれて非常な變化が見られた。岩石の如き堅氷に化してゐる處もあり、又特に北面若しくは北西面に於ては軟い深雪であつた。

此の西尾根はかのピラミッドの頂點にて絶巓をなしてゐる。吾々は更に屢々氷化せる急峻な雪面を登攀し、交互にトップを代りながら非常に慎重に進んだ。絶頂直下にて右方へ少し迂廻路をとつた。と云ふのは此の右方のみ頂上の雪庇がそれ程オヴーハングではなく又高も低かつたからである。

午後二時ゲットネルは雪庇をつき破つて通路を切開いた。そして吾々を結ぶザイルの一端は正しくシニオルチュの絶巓高く達せられた。

吾々の眼に映じた雪山の光景、それは全く夢幻の如きものであつた。南方へは急峻な支稜が派出し、その兩側は無數の氷溝によつてゑぐられてゐた。南北面共言語に絶して削ぎ落ち、而も氷から露出してゐる岩壁はむしろ少なかつた。吾々は下方のザッテルに待つてゐる仲間に登頂を知らすべく喜びに滿ちて叫んだ。かくする間にも陽光が急斜面の積雪を軟くするので下降を急がねばならなかつた。昨夜のビバーク地へ歸へるには四時間餘を必要とし非常に慎重に下らねばならなかつた。尾根の西面せる箇所は登攀に際しむしろ氷化してゐたにもかゝはらず、今や殆ど軟雪化しアイゼンのツアンツケンに丸々と附着し始めた。既に仲間の待つてゐるビバーク地に到着したのは、今し太陽の姿がカンチエンヂュンガの背後に消しさられんとする時であつた。其處で再び寒い晩をおくつた。翌朝吾々は人夫達が待つてゐる天幕に下り更にシニオルチュ氷河の最初の大雪涯下のキャムプサイトへ下つた。かくして九月廿五日の午頃B・Cに到着したのだつた。（望月達夫譯）

## 山岳部創立十五週年紀年晩餐會の記

柿原生

本年の初夏のこと、山岳部が創立されてから正に十五週年になる、何か有意義な試みを爲やうぢやないか――と云ふ話が始つたのでした。アレやコレと考えた末、お祭り騒ぎは中止して山岳部で今最も必要としてゐる天幕を贈り、部の活動に盡さうと云ふことに決定した。それが今夏劔澤合宿で使はれたウインバー天幕二張です。

それから早や夏も過ぎ秋を迎えて十一月、このまゝでも物足りないと言ふ譯で夕飯を食べ一夕を愉快に過すことになり、十三日の午後六時如水館の日本間にO・B、現役集ひ合つて水入らずのさゝやか乍ら樂しい一橋山岳部創立十五週年紀念晩餐會が催されました。

此處に集る者先輩十八名、現役十八名の大人數ですから正に空前の集會でせう。食慾そゝるスキ燒を前にしてゾロリと座を占めたのは壯觀の極みです。やがて中川大先輩立上つて一場の挨拶を試み、時局重大の折ではあるけれども山岳部の登攀は決して安逸をこれ事とするハイキングと同一視すべきものではない、宜しく

意氣旺盛にして冬山に向はれ度いと結びました。現役側は勿論のこと一同拍手です。

扨肉を喰ふ音がアチコチに立ち初めました。その中に中川氏の名指しで近藤先輩がシューとした和服のまゝ立上りました。そしていきなり「一體全體僕がクマさんより先に立つて話すなんて手は無いんだよ」と云ひ乍ら、その昔散文詩を物してゐた文學青年たりしコンチャンがクマサン指導のもとに遂に山男に成るの顚末を述べました。何でも豫科會の旅行計劃の下檢分に出かけてさる旅館に泊つた時のことだそうです。當時詩を書き同人雜誌を發行してゐたコンチャンはその時鬚面ばかりの理事連の中にゐた一人の男即ちクマサンにそゝのかされて山に登る志を抱いた。かくて壯嚴なる山行の結果は遂に散文詩の青年をして山男たらしめ、以來永遠に變らぬ友情に育まれて今日に至つたのだ、と言ふのです。クマサンをリーダーとして初めて北アルプスに入つたりしたこと何につけても常にこうした先輩の助力があつたこと、實にクマサンあつて僕は山男になれた——だから「一體僕がクマサンより先に立つて話すなんて手はないんだよ。」と言ふ故事因緣來歷があるのだ、と言ふのです。

そこでクマサンはやをら立上りました。コンチャンの告白によりますと、その昔の商大生クマサンは當時流行のセーラーズボンを御着用してゐたんだそうで、これには一同腹の痛くなる程大笑ひしてしまひました。さてクマサンは初めて山に入つた時の頃を物語るのです。山岳部に入つて生れて初めて山に入ることになりました——出發の驛は飯田町驛、目的のコースは燕から槍ヶ岳でそれを率いる御大將は今クサンの側にゐる中川さんこと孫さんだつたとの事。かくて孫さんをリーダーとしてクマサンが北アルプスに入るの時、親父殿は心配して驛迄見送りに來た上、孫さんに向つて「伜を宜敷くお賴み申します。」つて挨拶したとのこと、すると孫さんは「大丈夫御安心なさい、確に引受けました。」と返事をしたと言ふので、又しても一同大笑ひしてしまひました。（孫さん、クマサン揃つてニヤ〳〵笑つてゐるんです）。更に續いてクマサンは、初めて前穗に登つた時恐ろしい落石のあつたこと同僚の一人が傷をしたこと、もう山なんかに登るもんかと思つたこと等色々と話し續けて、山の先輩、同僚を持つ自分は本當に幸福であり、常にそれ等の人々の恩や友情に感謝し乍ら生活してゐるんだと結びました。

次に現役の側から小谷部君が立つて、最近の山岳部が記錄的にも優秀な成績を持つに至つたこと、部が緊張してゐること、そしてそれは嘗て堀岡さんが一人嚴然として山岳部を守つてゐて呉れたことから由來してゐるのだと思つてゐるのであること等、現在の部の事情を語ります。

それから渡邊氏が立ち、續いて久保田氏が長逝された中島嘉一郎さんの在りし日のこと、菰野菊の編輯のことなどを述べました。更に增山さんが、自分達の年度では自分が最も古い樣に考えられてゐるけれども、實は此處に居られる勝田君が先に入部したのであること、部誌「針葉樹」第六號編輯當時のことを語り、更に續いて林、吉澤松次郎、遠來の丸茂先輩達が交々各年度を代表して話し、再びクマサン立つて所謂動物園時代の回想を語り、現

役側からの望月君の話を最後にして雜談に入りました。この雜談の最中、近藤氏の發議に依つて渡邊さんが山の繪を部室に贈ることに一決してしまつたのです。

かくて愉快な水入らずの樂しい一夜を更し、先輩現役文字通り膝つき交えて懇談し、お茶漬御飯を頂戴して一同散會し、印象の深い忘れられぬ一橋山岳部創立紀念の晩餐會を終りました。當夜の出席人員實に卅六名、近來にない盛大なものでした。

當夜の模樣が地方の皆樣にも詳細に報告致し度く筆を執つたのですが、筆者自身醉然としてしまつたので宴半ばからの事は不覺にも能く想ひ起し得ず、止むなく以上の簡單な報告になつてしまつた次第です。此の點は平に御寛容の儀御願ひ申します。

## 山岳部報告

（九、一〇、一一月）

日　記

○夏山報告會　九月二〇日(月)　於國立しみづ
出席者　小谷部、望月、小林、森脇、和田、鷲崎、佐々木、榎本、船本、原、岩崎、大塚、日江井、高橋、里見、木島、宮城山出、小泉、

秋雨のそぼ降る夜、夏の明るい思出話に花を咲かせた。

○定期部員集會　九月廿四日　於本科部室
出席者（本科六名、豫科一名）

○定期部員集會　十月一日(金)　於本科部室　出席者(本科六名)

○定期部員集會　十月八日(金)　於本科部室

出席者　望月、森川、原、部員に登山中の者多く、集まる者が少なかつたが、具體的に奥又白合宿の計畫を爲す

○定期部員集會　十月十五日(金)　於本科部室
出席者（本科九名、豫科八名）豫科の試驗も終り、愈張切つて秋冬の登山計畫に熱中した。

○定期部員集會　十月二十九日(金)　於本科部室
出席者（本科八名、豫科六名）今秋の豐かな山行の報告を爲し更に冬に備へて裝備についての相談等を行つた。

⊙定期部員集會（十一月）

五　日(金)　於豫科部室　出席者（本科六名、豫科三名）
十二日(金)　於豫科部室　出席者（本科四名、豫科七名）
十九日(金)　於　部　室　出席者（本科七名、豫科四名）
廿六日(金)　於豫科部室　出席者（本科七名、豫科五名）

○十一月の懇談會　八日(月)　於豫科部室
出席者（西川正身豫科教授、望月、森川、佐々木、原、船本、大塚、日江井、里見、木島、宮城、高橋、小泉、山田、久保）豫科山岳部長として西川先生が就任せられたので、この機會に懇談會を開催した。

廿二日(月)　於豫科部室　出席者（本科五名、豫科六名）
冬の合宿についい決定をなし、これを中心に相談した。

記　錄

(1) 鹽見岳（八、一三—八、二三）大塚、山田
(2) 秩父縱走（九、二—九、八）大塚、日江井、金峰山から雲取山まで秩父の尾根縱走をした。

(3)鹿島槍岳（一〇、六—一〇、一〇）船木、岩崎
新雪後の快晴に惠まれて、今夏の思出も新らしい山々を間近く眺めることが出來た。殊に魏々たる劔岳の一脈は純白の薄衣を被つて實に美しかつた。扇澤の道は完全ではない。本澤へ出たら河原を降つても大して違はないと思ふ。

(4)蝶岳、大瀧山（一〇、一六—一〇、一八）小谷部
關西から廻つて來て、森川達を待つ間徒然なるまゝに歩き廻り後ば奥又白のパーティーに合した。

(5)奥又白より、四峰登攀（一〇、一八—一〇、二四）小谷部、森川
日江井、大塚
奥又白の池附近に幕營、快晴に惠まれて目指ずルートを完登し得た。（尙これについては詳細な報告を爲す筈でありますから參照せられるんことを望みます。）

(6)白峰三山縱走（一〇、一八—一〇、二四）里見、宮城、木島、豫二年の部員だけで試みた。天氣は比較的良く、雲もあまり多くなかつたが、意義深き山行であつた。

(7)鋸岳、仙丈岳（一〇、一八—一〇、二四）山田、小泉
これは豫科一年の部員のみで行はれた。

(8)笠ヶ岳、武能岳、蓬峠越え（一一、二六—一一、二八）望月、佐々木、大塚、木島
谷川岳まで縱走する積りで行つたが、新雪のラッセルが餘り早いので、蓬峠を越えた。スキーを待つて行けば充分使へる位の積雪であつた。

記　錄

○鳩待峠を越へ至佛狩小屋を經て水上へ　吉澤一郎

八月二十日上野發（後一一・三〇）
八月二十一日　晴
沼田（前三・二〇—三・三〇）バス—追貝（四・二五）—鎌田（四・四〇）—古中（五・〇〇）—堂平山の北側の澤（六・〇〇—六・三〇）—十二半の上の石祠（—七・〇〇）—赤澤（八・四五）—小赤澤（九・〇五—九・五〇）鳩待峠（一二・〇〇—一二・一五）—ヨセ澤（一二・三五）—山ノ鼻の小屋（一・四五）
八月二十二日　晴曇
小屋（前六・五〇）—草地（七・二五）—這松（八・〇〇）—至佛頂上（一〇・〇〇—一〇・五〇）—狩小屋澤下る（一一・二〇）—狩小屋（三・一五—三・三〇）—ヘエズル澤（四・一〇）—シシトリユ澤（四・三〇）野宿と決心す
八月二十三日　大雨後晴
野極地（五・三〇）—小槍股川（六・五五—七・〇〇）—八谷越頂上（七・三五）—湯ノ小屋温泉（七・五〇—一〇・四五）—上野原へ登らず古道を行く）—トンネル（一一・三〇）—利根用本流落合（一一・四〇）—寶川との分岐點（一二・四五）—横山（一・一〇—二・二〇）バス—水上（三・〇〇—四・二九）—歸宅（九・〇〇）

中川孫一

○六ツ石山（十一月七日）
氷川—絹笠—六ツ石山—榛ノ木尾根—小中澤—境
夕映に輝く多摩南岸の山々殊に〜形にスカイラインを截る大嶽の山容は印象に殘る。川苔は眉を壓するやうに近く大きい。六ツ石の頂上から見た鷹ノ巣は立派だ。雲取は雲の中。歸路は頂上から南に出てゐる榛の木尾根を古い踏跡を頼りに降つた。例の如く蜘蛛の巣と丈なす茅戸に惱まされた。青梅街道（境附近）

に出た時陽はトップリと暮れた。

○大　山（十一月二十三日）　中川孫一

伊勢原―大山町―下社―頂上―ヤビフ峠―簑毛―大秦野

相模平野に君臨する王者でありながら、山岳人から忘れられた山だ。が登つて見て全く認識を新にした。先達の家と土産物屋が軒並に立並ぶ石段の町大山の有つてゐる特異の風格。ケーブルがあるとは云へ其終點下社から、亭々と聳ゆる杉の巨木の林間を縫つて七、八百段もあらうと思はれる石段を踏み越え〳〵六百米近くも登る表參道は充分君の登る慾を滿足させるだらう。絶巓からの相模平野否、太平洋を腑瞰する雄渾な景觀は丹澤にも優るだらう。ヤビツ峠への新道はこれこそ女坂いや子供坂だ。五十萬の信徒と開山二千年の歴史を有つ大山はさすがに關東の名山だ。一度は杖を曳いてみたまへ。

消　息

森健二君（舊姓十合）西宮市森具蓮毛八三八番地へ轉居。

小柳二郎君　名簿中住所の齋藤方を削る。

一橋山岳部創立十五週年紀念會　十一月十三日　於如水館

出席者（會員）中川、吉澤、村尾、渡邊、近藤、久保田、吉澤松次郎、増山、丸茂、清水、高瀬、山口、小柳、林、新羅、柿原（部員）望月、小谷部、小林、森脇、和田、森川、佐々木、鷲崎、榎本、岩崎、原、船本、大塚、日江井、高橋、里見、木島、小泉

此の會は十一月の定例集會をも兼ねて催されたもので、大變な盛會であつた。當夜の模様は前掲記事御參照のこと。

定例集會　十二月十一日　於如水館

出席者（會員）中川、渡邊、吉澤、村尾、近藤、吉澤松次郎、園山、山口、關、増山、鈴木、林、松浦、新羅（部員）望月、小谷部、森川、佐々木、船本、日江井、小泉、山田

ドイツより歸國した後天津に赴き、事變下の支那に活躍した關守三郎氏より時局談を聽く。又森川より今冬奥又白を中心に行はれる山岳部合宿の具體的なる計劃に就き説明あり、あとは例の如くして散會。

編輯後記

十二月中に出す豫定の第八號が大變に遲れて誠に申譯ない次第ですが、これ全く小生の怠慢によりますので、言譯しても何にもなりませんから平謝りに謝ります。

現役の連中は奥又白の合宿を遂行しつゝあり、誠に勇ましき極みです。申分ない結果を收めて歸京するのを樂しみに致しませう。省みて會員の去來を想えば、近藤恒雄氏九州に去らんとし、林俊介君又北海道に轉ぜんとす。心淋しき十二年の暮れであります。心して兩氏の轉任を送りませう。

次に山岳部よりの通知左に

御賣捌きを御願ひ致せし針葉樹第九號の代金未納の方は左記宛御送金下さる様御願ひ申します。

東京市杉並區阿ヶ谷五ノ六十三
望月達夫宛